

「長洲町の植物」について

長洲町は熊本県の中でも嘉島町に次いで土地面積の少ない小さな町です。しかし西は有明海に面し東は玉名木葉へと続く熊本平野の一端をなし、日立造船やトステム、不二ライトメタルなどの工場が進出し、今では工業・漁業・農業の町です。元々長洲という町は漁業の町でした。地名からして長い須があり、これがだんだん陸地化し人が住み着くようになって現在に至ったものです。

戦時中に防空壕を掘った時のことです。地面を掘り進んで行きますと、貝殻の層があったり、また山砂の層があったりしたことを子供心に覚えております。山砂の層は恐らく小岱山から流れて来たのでしょう。小岱山は花崗岩質の山で、花崗岩が風化して出来たのが山砂です。古い時代に小岱山でも土石流があったと聞いたことがあります。砂浜の上に山から川砂が流れ込み徐々に堆積し、時には想像絶する豪雨もあったことでしょう。このようなことが繰り返し起きて、陸地化していったのではないのでしょうか。

植物相は海沿いにはオカヒジキやツルナ、ケカモノハシ、ハマヒルガオなどの海浜植物が生えています。一方、六栄小校区は小高い丘を形成し、加藤清正公が干拓事業を始めるまでは、そのすそ野には海が迫っていたと考えられます。従って六栄小校区にタブノキやヤブツバキ、カクレミノ、ノシランなどの沿岸性特有の植物が生育しているのはこのためだと思います。このように長洲町は小さな土地面積にもかかわらず海浜植物から沿岸性植物、更に里山を主役であるヒサカキ、アラカシ、ネズミモチなどの植物が見られます。

長洲町では昭和30年以降の高度経済成長の波が押し寄せ、日立造船を始め様々な企業が進出し、荒尾市大島町から長洲町の姫が浦に続く長い白砂青松の砂浜がありましたが、ここにはコンクリート護岸が設けられ、海浜植物にとっては致命的な分断が生じました。過去の文献から、そこに生育していたと思われるハマタマボウキやハマニガナ、ボタンボウフウなどの海浜植物が姿を消しました。

さらに同年代に始まったノリ網漁により海の姿も一変し二枚貝が徐々に姿を消しました。しかし、最近になって二枚貝も多くなり、ノリ

網の下には大型のヒラメやクッソコ等が数多く見られるようになり、再生の兆しも見え始めています。



昭和３２年頃の長洲海岸

長洲町の町民憲章に「私たちは豊かな自然と有明海の恵に感謝し長洲町民であることに誇りを持ち 郷土の限りない繁栄と幸福を願って この憲章を定めます・・・ 以下省略」と記されております。２年ほど前、長洲町役場に足を運んだ時、玄関前に掲げてある「長洲町民憲章」を改めて読み直し、何かお役に立ちたいと思っていた事もあり、「長洲町植物観察保護の会」を設立しました。

私が会長役となり事業の推進に努め、今の長洲町にはどんな植物が生えているのか調べて参りました。調査する植物も草本、木本などでしたが、会員相互の知識向上のため、これまで個人的に蓄えていた植物のデータベースをもとに、観察会などのデーターを加え、これまでに長洲町で確認した植物約７００種の中から６００種を選び、文書化を進めていました。長洲町役場「まちづくり課」のご配慮もあって、ここに「長洲町の植物」が出来上がった次第です。

町内を散歩する時、本書を携行し長洲町にどんな植物が生えているのか、そしてどんな名前の植物なのか、そのガイド役を果たすために編集したものです。長洲町の皆さんが少しでも植物に興味を持っていたければ幸いに存じます。

長洲町自然観察保護の会
会長 塘岡 高穂